

結章

本研究の総括

本研究の目的は、韓国における民族スポーツを創造の視点から分析し、それが創られていくプロセスを明らかにすることにあつた。この試みは、韓国文化を理解するうえで有益であろうと思われる。そこで筆者は、パースペクティブとして、韓国という国が1948年に建国されて以来の韓民族スポーツの創造と変化の過程と、それをめぐる語りを政府と担い手の相互関係のなかから分析し、韓民族の民族的帰属性（＝民族のアイデンティティ）について論じることを試みた。

以下、本研究でおこなった調査結果および考察を各章ごとに整理した上で、本研究の位置づけについて述べていく。

第1章では、全国民俗芸術競演大会について検討した。

競演大会は政府が主催し、民族スポーツや伝統的歌舞を一堂に会して披露し、また競い合わせるイベントとして1958年にはじまり、1961年からは恒例化し、今日に至っている。大会は当初から定期大会として位置づいていたのではなく、1961年にソウルで開かれた政府主催の会議において初めて定期大会として位置づけられた。政府の指導の下での韓民族スポーツの保存と振興が求められ、同時に地方大会をおこない、これを全国大会の予選とすることも決定され、ここに大会の全国組織化が実現したのである。こうした背景をもつ大会は、韓国のナショナル・アイデンティティを発現させる文化装置とみることができる。

では、国家政策の下に進行するナショナル・アイデンティティの強化に、もう一方の主体、担い手の側のアイデンティティ強化はどのような形で展開しているのだろうか。2章以下では、この問題を取り上げ、政府の文化政策を受けて、個々の民族スポーツの担い手たちがどのような意図をもって、民族スポーツを創りあげていったのか、そのプロセスを明らかにしようとする作業をおこなった。

第2章では、密陽百中戯について検討した。

1957年、密陽では嶺南樓の再建を記念して、密陽文化祭が催された。1960年代末密陽の人々は、政府の文化政策を受け、廃れてゆく密陽の伝統文化を「われわれ民族固有のもの」と認識しはじめた。具体的には、密陽文化祭開催の目的を変更し、さまざまな民族スポーツの掘り起こしがおこなわれた。そうした動きと連動して創られたのが密陽百中戯であることがわかった。密陽百中戯は1970年から1980年にかけて、それを構成するさまざまな要素が変化（追加、削除）した結果が文化財となったことがわかる。またそのような一連の動きのなかで中心的な役割を果たした担い手について、その出自を検討すると、彼らはかつて乞粒牌の血を引く者、妓生と関わる

者、男寺党牌の血を引く者などであったと推察される。彼らの社会的ステータスは、両班でも、衙前でもなく、彼らはかつて賤視された人々の末裔であり、また彼らによって独自に担われてきた諸芸が、新たに密陽百中戯として統合されたことがわかった。

第3章では、弓道について検討した。

1989年に始まった「忠壮公南以興將軍崇慕式」がどのように創られ、その後、どのように変化していったかについて検討するなかで、わけでも弓道が南氏門中のアイデンティティと深く関わることが確認された。

最初の崇慕式は將軍の崇高なる精神と忠節を宣揚し、民族精気を正すものと位置づけられ、その規模も小規模なものであった。それが回を重ねるに従い、祭りのなかに、さまざまな民族スポーツや將軍に因んだ諸イベントが付加されていく。その結果、崇慕式は桃李里から唐津郡へ、そして忠清南道へと、祭りに関連する集団の範囲を次第に拡大していったのである。そして祭の内容も、単調な催しから多様化したものへと変化し、さらに崇慕会や弓道大会の運営組織および参加規模も唐津郡から忠清南道へと拡大した。また財政規模も、大幅に増額しつつあるといえる。

こうした祭りの規模拡大現象は、韓国社会の地域祭りに容易にみられる一般的な趨勢として捉えることも可能である。しかし、これと同じように祭りの帰属意識が忠清南道規模へと拡大したと述べることはできない。なぜなら、崇慕式の直接の舞台となる桃李里の在地両班としての南氏門中では、祭りへの関与が強まる一方、1992年の湖西地区弓道大会の開催、1993年の弓道場の造成、1994年の忠壮亭の建立、ならびに忠清南道道知事盃弓道大会の開催、1995年の忠壮亭の運営組織の編成など弓道と関わる動きが際立っているからである。つまり南氏門中にとって弓道は、崇慕会によって取り入れられたほかの民族スポーツやイベントと違って、崇慕式をより一層盛り上げるための祭りの核として特別に位置づけられているものだった。こうした南氏門中の弓道を介した祭りの拡大戦略には、南氏門中による両班文化のリバイバルがその背景にあったと考えられる。さらに崇慕式が、唐津郡の認める祭りとしての地位を獲得していくことも重要な点である。

この崇慕式の弓道は、社会文化的側面において経験した強い変容に抵抗する、いわば文化焦点として機能しており、南氏門中だけが有している忠壮亭、忠壮祠、遺物館などの象徴的資本は彼らの精神文化を支える源泉となっている。かつて朝鮮時代にあった身分社会における象徴資本に比べれば、その効力は劣るかもしれない。しかし、これらは地域社会において依然とその影響力をもっている。だからこそ、南氏門中はこのような象徴的資本の蓄積のため、門中内だけでなく、地方自治体や地方の文化団体などの支援を得るための努力もするのだ。身分社会が崩れて1世紀が過ぎたが、過去の秩序は完全になくなったのではなく、このように新たな形で再創造されているのである。この失われた秩序の再建は、彼ら南氏門中のアイデンティティの再建ともいえる。さらに祭りは、価値と関連する部分において元来の質を維持しながらも、運営方法の面においては大きな変化を見せているといえる。

第4章では、機池市里綱引きについて検討した。

建国後、機池市里綱引きが初めておこなわれたのは1960年3月であった。その後1968年までは機池市里住民と近隣住民は、綱を準備しともに引くことによって地域一体化の体験を得ていた。

ところが、1973年に綱引き推進委員会が結成されてからはさまざまな変化が現れた。たとえば、1973年12月に綱引きが忠清南道民俗文化財第35号に指定されることによって、近隣村と機池市里住民の心は綱引きから離れていき、綱引き行事の象徴的な役割だけでなく、実質的な役割に参加する者は、機池市里住民を核とする近隣村人から地域有力者の綱引き推進委員会メンバーへと変わっていった。また1976年12月「機池市里綱引きの記念碑」を建てることによって、村人たち（近隣地域住民を含む）は綱引きに対する歴史認識を変え、綱引きの起源を400年伝説と語るようになった。それは提唱者李禹永とその同調者によって、つねに特定の歴史や物語と結びつけられ、大きな影響力を行使するまでになった。しかしそれは大方の住民の考えとは相容れない内容のものであった。さらに元来関係のなかった堂祭や龍王祭などといった伝統的な儀礼が1975年に綱引き祭りの一部として組み込まれ綱引きを正当化し、権威づけていった。

建国後、機池市里の人びとによって書かれた綱引きの歴史は、地域住民の歴史と生活状況に直結し、根づいたものではなかった。

これまで綱引きに関するさまざまな資料を収集してきたが、筆者が再構成したものと、彼らが当時再構成したものとは、いくつかの点においてその性格が異なることがわかった。また地域社会の成員は、失われた伝統を再建しようとするが、再建された伝統は「元々の伝統」と同じものではない。「元々の伝統」とのちに創られた伝統の乖離は大きいこともわかった。さらに、担い手の歴史認識や解釈が、当時（あるいは現在）置かれていた状況と深いかわりをもっていることもわかった。つまり、彼らは伝統の創造と育成、保存を助けるという「ナショナリズム」を前面に押し出してきた。その思いを表現する新たな場所を探し、見つけたともいえる。すなわち、綱引きの由来や儀礼などさまざまな祝祭の場面において、ナショナリズムを表出させることによって、当時彼らが直面している危機（廃れてゆく伝統文化）に対応する戦略を作り出したのだ。昨今の韓国の産業構造における農業の位置づけは、ますます衰退し、農民たちの役割も減少化する一方にある。また、彼らの社会的地位も相対的に低下した。このような危機的といえる社会的状況のなかで、農民たちは彼らの毀損された社会的役割と地位がリバイバルされることを願っていたのではないだろうか。そうすることによって、自分たちのアイデンティティを再確認するとともに、国家と民族のために幾分貢献できる存在であることを、担い手たちは熱意を込めてこの綱引きに託していたのかもしれない。

以上を要するに、韓民族スポーツは多様な方法で創り出され、そして民族スポーツは民族的帰属意識を復活させる有効なメディアとして、その存在が期待されたといえよう。

結論

韓国における戦後のはじまりは、1945年の8月15日である。本来なら、自分たちの力で独立をしなければならなかったが、外部の力で独立させられ、また朝鮮半島は分断された。その結果、1948年8月15日には大韓民国が、そして9月9日には朝鮮民主主義人民共和国という国がそれぞれつくられた。つまり、戦後体制のメインストリーム（主流）は韓国と諸外国（とくにアメリカ）との合作だったのである。合作であるがゆえに、政治・経済などさまざまな面においてアメリカの影響をストレートに受けてきた。いわば韓国は、アメリカにがっしり抱きしめられていたわけであり、反対に自身も抱きしめている、そういう構造であった。

しかし、そうしたアメリカとの合作が建国後の経済的繁栄を作ってきたのも事実である。それを実体的に担保してきたのが韓米安保であり、50年たってアメリカは、韓国民の体の一部になっているほど身体化していたのだ。

こうした外部の力による分断、そして建国であったがゆえに、韓国には絶えず、自分は何なのかと問わざるをえないという構造が内在していた。「韓国（あるいは韓国人、韓民族）とは何か」、つまり民族のアイデンティティの問いと向き合わなければならなかったのである。

建国後、政府は韓国のナショナル・アイデンティティをどこに置くかという議論のなかで、この韓民族スポーツにアイデンティティを代弁させ、新しい時代の韓国のあり方を構築していこうと考えていた。そうした意図から政府は、伝統文化を国民的なものと意味づけ、国民文化の象徴に持ち上げていったのである。つまり、民族意識の高まりのなかで民族スポーツに注目し、民族のアイデンティティの再生産を民族スポーツによって実現しようとしたのだ。

たとえば、政府によって毎年10月におこなわれる全国民俗芸術競演大会は、その典型である。大韓民国の建国後、政治・経済を含む文化のあらゆる領域で近代化が進行するなかで、伝統文化の消滅の危機が意識され始めた頃、この全国民俗芸術競演大会が開かれるようになった。今日、全国民俗芸術競演大会は朝鮮半島の南の韓国にとどまらず、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）をも含んだ形で韓民族の魂をふるい立たせるために毎年催されている。

また政府は、1950年代から半世紀をかけて民族スポーツを創り上げる上で、ナショナルリズムを巧みに利用してきた。すなわち、すべての危機は「国家と民族の危機」と認識させるため、その危機克服の主体はつねに「わが国」、「わが民族」であるとして超歴史化、神聖化しながら、無条件の忠誠と服従を正当化していったのである。その裏には、“砂粒化した（しつつある）個人”の問題があると思われる。つまり、「もう一度なんらかの共同体意識をみんなが共有できないだろうか」、あるいは「ある種の共同体を再構築できないだろうか」といった気持ちがナショナル・アイデンティティの模索につながっているのだ。いいかえれば、そこまで個人が砂粒化して、社会が行きつくところまでゆきついた混沌とした時代が続いていたということかもしれない。

民族スポーツの創造という行為は、韓民族としての彼ら/彼女らの象徴的なアイデンティティを創り出す装置なのである。なんとか韓国人のよりどころを維持しようとするもののあらわれが、今日の韓国における民族スポーツであり、その意味で韓国文化は、政府による民族スポーツの国民文化化とナショナル・アイデンティティの模索の二重現象が同時に進んでいるなかに置かれて

いるといえるだろう。

一方、担い手側は政府の文化政策を受け、政府との関わりのなかで民族スポーツの国民文化化が果たされたといえよう。そのような意味においては政府と担い手は共生関係にあるといえる。